

西大寺旧境内の調査

—第505・第521次

1 はじめに

その法灯を今日まで伝える西大寺は、天平宝字8年(764)に称徳天皇(当時は孝謙太上天皇)の発願により建立された官大寺である。創建当初は東大寺に匹敵する広大な寺域を有していたにもかかわらず、現在は当初の伽藍の大部分が市街地化し、伽藍中枢部の正確な範囲すらまだ確定できていない。ここに報告する平城第505・521次調査の調査地は、平城第409・422次調査(『紀要2007』、『紀要2008』)で確認された薬師金堂の近隣に位置する(図Ⅲ-18)。宝亀11年(780)成立の「西大寺資財流記帳」(以下、「資財帳」)の記載によれば、薬師金堂の東西には軒廊が取りつき、さらにその周りを回廊がめぐっていたとされる。両調査区内でもそれら金堂院に関連する遺構の存在が予想された。

(諫早直人・小田裕樹)

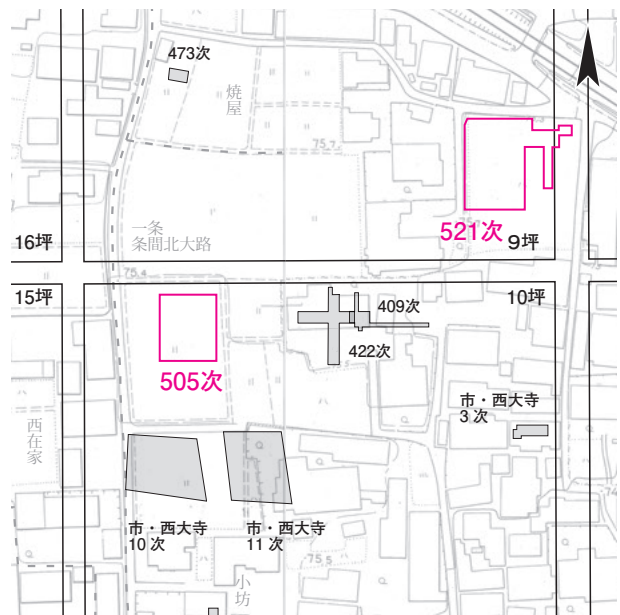
2 第505次調査

はじめに

第505次調査は奈良市西大寺小坊町内でのマンション建設に先立つ発掘調査である。調査地は平城京右京一条三坊十坪内にあたり、西大寺薬師金堂の西端から西方約10mに位置する。建設予定地において、約262.5㎡(南北17.5m×東西約15m)の調査区を設定した。掘削にともなう土置場の関係上、まず東半部分(南北17.5m×東西7m)の調査をおこない、東半部分を埋め戻しながら西半北部(南北8.5m×東西8m)、そして西半南部(南北9m×東西約8m)の調査を順次おこなった。調査は2013年2月12日に着手し、4月26日をもって終了した。

基本層序

第505次調査区内には、上から現代の駐車場整備盛土(約80cm)、旧耕土(約20cm)、床土(約30cm)、西大寺造営にともなう整地土および基壇土(20~30cm)、西大寺造営以前の整地土(30~50cm)、灰色粘土ないし灰褐色粗砂からなる地山の順に堆積する。西大寺に関連する遺構の検出面の標高は74.9~75.1mで、地山の標高は74.1~74.6mである。西大寺造営以前の整地も整地土出土遺物から奈良時代になされたとみられるが、遺構の重複関係などが



図Ⅲ-18 第505・521次調査地位置図 1:2000

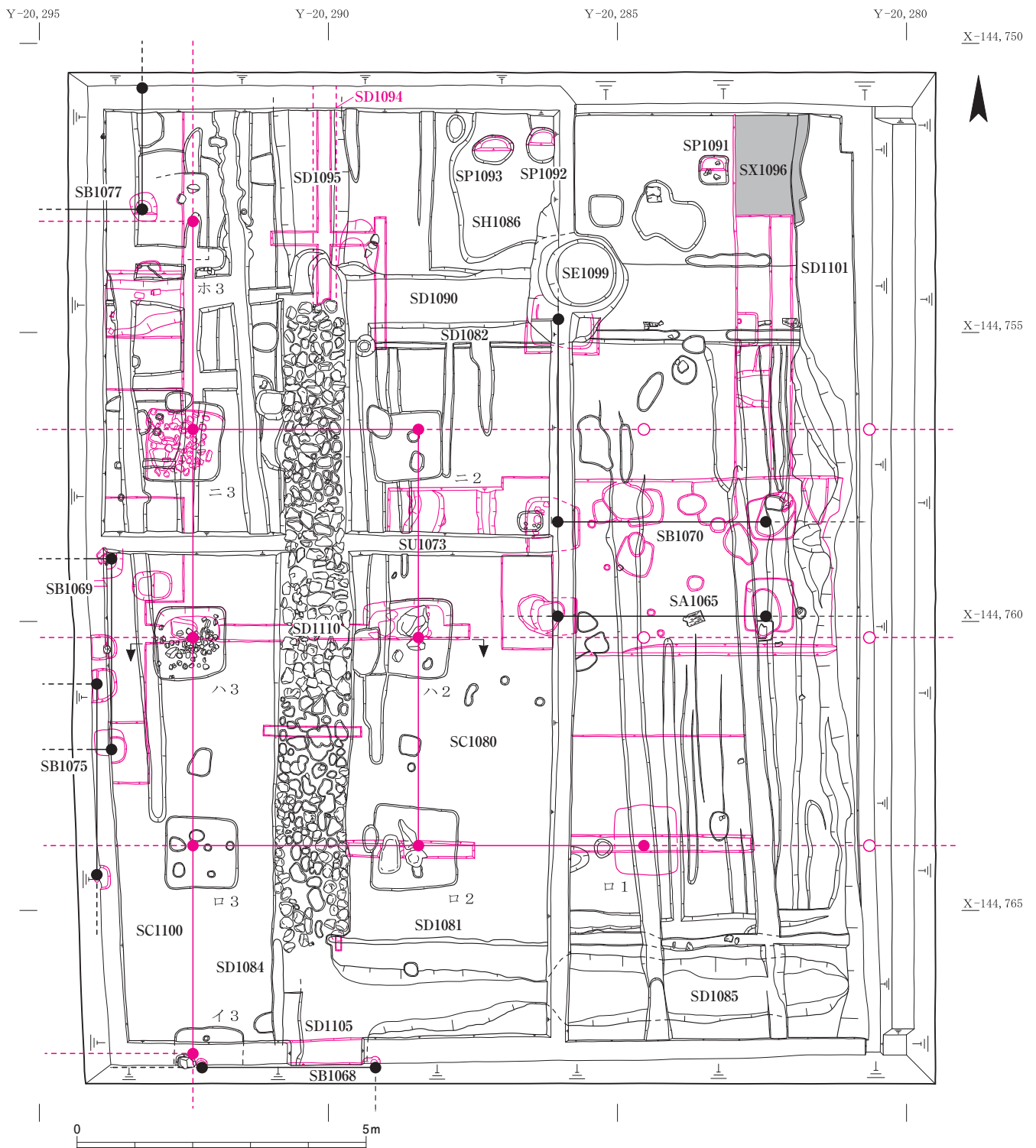
ら一度になされたものではなく、遷都後、西大寺造営に至るまで複数回におよんでいる。

検出遺構

①西大寺金堂院に関連する遺構

西大寺造営にともなう茶褐色ないし赤褐色粘質の整地土が10~30cmの厚さで調査区全面に広がる。西大寺金堂院に関連する遺構は基本的にこの整地土よりも上面で検出した。

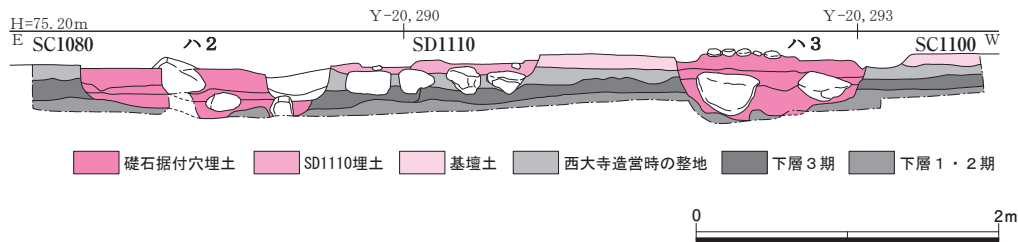
金堂院軒廊SC1080 調査区中央で、一辺100~150cmほどの方形の礎石据付穴を4基検出した(口1・口2・ハ2・ニ2)。調査区東方で確認されている薬師金堂SB1000とほぼ柱筋を揃え、薬師金堂の西妻に取りつく軒廊を構成する礎石据付穴とみられる。柱間は、梁行12尺(3.6m)、桁行13尺(3.9m)である。後述する軒廊南雨落溝SD1085北肩と軒廊北雨落溝SD1090南肩の間、10.9mの範囲には西大寺造営にともなう整地土上に黄褐色粘質土が10~15cm確認され、基壇土とみられる。基壇土内には施釉瓦磚を含む多量の瓦片、凝灰岩片などが含まれていた。礎石据付穴は断割調査の結果、軒廊西妻に相当する3基(口2・ハ2・ニ2)は、50cmほどの大きな石を含め大小さまざまな根石を据えており、遺構検出面からの深さも30~40cmと深かった(図Ⅲ-20)。一方、軒廊の南側柱にあたる口1は根石が確認できず、遺構検出面からの深さも10~15cmと浅かった。また口1の北側の柱想定位置については、断割調査によっても礎石据付穴を検出することができなかった。遺構検出面の標高にほとんど差がないことをふまえると、西面回廊と接続する西妻部分のみ特に



図Ⅲ-19 第505次調査区遺構平面図 1 : 100

深く掘って大きな根石を据えた可能性が高い。根石の石材は多様で、遺構検出面で大きな根石が3石確認された口2をみると、花崗岩、安山岩、チャートとそれぞれ異なる石材が用いられていた（本調査の石材分析はすべて脇谷草一郎・田村朋美による）。なお基壇外装は出土しなかったが、東西溝SD1081・1082は、基壇外装の抜取痕跡の可能性がある。

軒廊南雨落溝SD1085 調査区の南部で検出した幅約120cm、深さ約10cmの素掘り溝である。西端で後述する西面回廊東雨落溝SD1105・石敷き南北溝SD1110と接続し、軒廊SC1080の南雨落溝とみられる。SD1105との接続部分まで約8.3mを検出した。埋土は炭混じりの灰褐色細砂で、後述する金堂院所用瓦をはじめとする多量の瓦を含む。



図Ⅲ-20 中央部東西断断面図 1:50

軒廊北雨落溝SD1090 調査区北部で検出した幅約100cm、深さ約10cmの素掘り溝である。西端で西面回廊東雨落溝SD1095・石敷き南北溝SD1110と接続し、軒廊SC1080の北雨落溝とみられる。SD1095との接続部分まで約7.8mを検出した。埋土は炭混じりの灰褐色粗砂で、金堂院所用瓦をはじめとする多量の瓦を含む。

金堂院西面回廊SC1100 調査区西側で、一辺約120cmの方形の礎石据付穴を5基検出した(イ3・ロ3・ハ3・ニ3・ホ3)。軒廊SC1080や薬師金堂SB1000と柱筋を揃え、金堂院の西面回廊の東側柱を構成する礎石据付穴とみられる。柱間は、西面回廊SC1100の桁行が12尺(3.6m)で軒廊SC1080と柱筋を揃え、SC1080との接続部分が13尺(3.9m)である。西面回廊東雨落溝SD1095・石敷き南北溝SD1110の西肩よりも西側3.5mの範囲には西大寺造営にともなう整地土上に黄橙色粘土が確認され、基壇土とみられる。基壇土は調査区北端では約30cm遺存するが、南ほど薄くなり、X-144.764付近より南では完全に削平されてしまっている。基壇土内には薬師金堂所用軒丸瓦を含む多量の瓦片、凝灰岩片などが含まれていた。礎石据付穴は断割調査の結果、SC1080との接続部分にあたるハ3・ニ3は50cmほどの大きな根石を含め、大小さまざまな石が据えられており、遺構検出面からの深さも30~40cmと深かった(図Ⅲ-20・21)。これに対し、接続部分以外の礎石据付穴(イ3・ホ3)は根石が疎らで遺構検出面からの深さも10~15cmと浅かった。遺構検出面の標高にほとんど差がないことをふまえると、SC1080と接続する部分のみ特に深く掘って大きな根石を据えた可能性が高い。根石の石材は多様で、断割調査をおこなったハ3をみると、底面にまず安山岩の大きな根石を据え、ある程度土で埋めた後に花崗岩や片麻岩などの小さな栗石を敷いていた。なお基壇外装は出土しなかったが、南北溝SD1084は基壇外装の抜取痕跡の可能性はある。

西面回廊東雨落溝SD1105 調査区南端で検出した幅約120cm、深さ約20cmの素掘り溝である。北端で南北溝SD1110、軒廊南雨落溝SD1085と接続し、西面回廊SC1100薬師金堂前庭部側の東雨落溝とみられる。SD1110との接続部分まで約2.0mを検出した。埋土上層

は灰褐色砂質土で多量の瓦を含み、埋土下層は粗砂で、遺物をあまり含まない。

西面回廊東雨落溝SD1095 調査区北端で検出した幅約100~120cm、深さ約20cmの素掘り溝である。南端で南北溝SD1110および軒廊北雨落溝SD1090と接続し、西面回廊SC1100弥勒金堂前庭部側の東雨落溝とみられる。SD1110との接続部分まで約3.7mを検出した。埋土上層は浅黄色砂質土で金堂院所用瓦をはじめとする多量の瓦を含み、埋土下層は粗砂で、遺物をあまり含まない。

なおSD1095の直下で、西大寺造営にともなう整地土を掘り込む幅約50cm、深さ約20cmの南北素掘り溝SD1094を検出した。埋土は粗砂で、遺物をほとんど含まない。南のSD1110やSD1105の下では確認されず、調査区北方へ延びていく。SD1094とSD1095の間には弥勒金堂前庭部側から広がる整地土が堆積しており、金堂院造営過程に掘削され、完成以前に廃絶したものとみられる。

石敷き南北溝SD1110 調査区西側中央で検出した幅約120cm、深さ約20cmの石敷き溝である(図Ⅲ-22)。南端で西面回廊東雨落溝SD1105および軒廊南雨落溝SD1085と、北端で西面回廊東雨落溝SD1095および軒廊北雨落溝SD1090と接続する。軒廊と西面回廊の接続部分を横断する石敷きの暗渠状遺構とみられる。長さは石敷きの範囲で約11.1mをはかる。溝底面に10~30cmの玉石を面を揃えて敷き詰めている。石敷きには多様な石材が用いられており、チャートがもっとも多く安山岩がそれに次ぐ。石敷きのいくつかは抜き取られていた。埋土は、基壇土に由来するとみられる黄橙色粘土や、土器片、瓦片、凝灰岩片などを含む炭混じりの灰褐色砂質土で、埋土の一部に基壇外装に由来するとみられる凝灰岩の切石片が集積していた。雨落溝に堆積していた砂は、雨落溝との接続部分以外はほとんど認められない。また側石や側板などの痕跡は確認されず、上部構造については不明である。石敷き南端の標高が北端よりも10cmほど高く、南から北へ排水したとみられる。

瓦敷きSH1086 調査区の北東部、西面回廊東雨落溝SD1095の東側、軒廊北雨落溝SD1090の北側に東西7.5m、南北3.8mの範囲で確認した厚さ5~10cmの瓦堆積



図Ⅲ-21 SC1100礎石据付穴ハ3断割(北から)

層。5～10cmの平瓦片からなる。下には粗砂が5～10cm堆積している。弥勒金堂前庭部側に広がるとみられるSH1086がいつ形成されたかは不明であるが、瓦の堆積状況からみて西面回廊東雨落溝SD1095や軒廊北雨落溝SD1090の埋土上層よりは古い。

土坑SP1091～1093 調査区の北東部で検出した一辺(直径)50～70cm、深さ10～20cmほどの方形ないし円形の土坑。瓦敷きSH1086下の粗砂直下で確認され、西大寺造営にともなう整地土を掘り込んでいる。埋土には瓦の細片を多量に含んでおり、SH1086形成以前に破損した瓦片を廃棄したものとみられる。

②西大寺創建以前の遺構

西大寺創建にともなう整地土・基壇土の下に、少なくとも3時期の整地面とそれらを掘り込む柱穴を確認した。これらの下層遺構に対する調査は、部分的なものに留まるが、整地土や柱抜取穴には瓦や奈良時代の土器などを含み、いずれも奈良時代の整地とみられる。ここからは時期の古いほうから順に下層1～3期と表記する。

下層1期の遺構 地山ないし灰茶褐色粘質の整地土(標高74.5～74.6m)で検出した遺構である。掘立柱建物SB1068・1075・1077や炭溜りSU1073などがこの時期に該当するとみられる。出土遺物からいずれも奈良時代とみられる。SB1075の2基の柱穴から出土した柱根は、どちらも直径15cmで断面六角形に加工されており、下部に長方形孔をあける。柱間は11尺(3.3m)をはかる。このほかに掘立柱建物SB1068が柱間10尺(3.0m)で東西に柱筋を揃え、掘立柱建物SB1077が柱間7尺(2.1m)で南北に柱筋を揃える。いずれも調査区外に展開するため規模は不明だが、建物の一部とみられる。

下層2期の遺構 灰褐色ないし暗灰色粘質の整地土(標高74.7～74.8m)で検出した遺構である。下層2期の整地土は下層1期の整地土とよく似るが、整地土内に確実に瓦片を含み、一部炭が混じる。掘立柱建物SB1069などがこの時期に該当する。SB1069は柱間11尺(3.3m)で南



図Ⅲ-22 SD1110北半検出状況(南から)

北に柱筋を揃える。

下層3期の遺構 黄灰色粘質の整地土(標高74.8m)で検出した遺構である。掘立柱建物SB1070、掘立柱東西塀SA1065などがこの時期に該当する。SB1070とSA1065は柱穴の掘方が一辺80～100cmと、下層1・2期の柱穴(一辺40～50cm)に比べて大きい。SB1070の柱間は12尺(3.6m)等間、SA1065の柱間も12尺で柱筋を揃える。SB1070の北西隅の柱抜取穴からは木簡や金付着半円棒をはじめとする木製品が多量に出土した。(諫早)

その他の遺構 調査区の北東隅、南北2.5×東西1.5mの範囲で、下層3期の整地直下(標高74.6～74.7m)から樹皮敷きSX1096(図Ⅲ-23)が面的に確認された。幅1～2cmほどに細く裂いた樹皮を何重にも敷き詰めている。調査区の一部で確認されるにとどまるが、下層3期の整地をするにあたって、とくに地盤が軟弱なところに局所的な地盤補強をおこなっていた可能性がある。

なお樹種などをあきらかにするため、10×10cmの範囲でサンプリングをおこない水洗したところ、樹皮に木片が付着しているものが複数点確認された。プレパラートを作製し生物顕微鏡で観察した結果、仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる針葉樹材で、早材から晩材への移行は緩やかで晩材部の幅が狭く、ヒノキ型の分野壁孔が1分野に1～3個存在することなどから、ヒノキ属と同定される。また本資料には直径約0.1mm程度の孔が複数あり、その中には虫糞と考えられる粒状の塊が充填



図Ⅲ-23 SX1096検出状況(東から)

されている箇所も観察された。なお本資料については、下層3期の年代をあきらかにするために放射性炭素年代測定を実施した(本書206頁参照) (諫早・星野安治)

③西大寺金堂院廃絶以後の遺構

井戸SE1099 調査区北部中央で検出した直径1.7m、深さ1.5mの素掘りの井戸である。軒廊北雨落溝SD1090および下層3期の掘立柱建物SB1070北西隅の柱穴と重複し、これらより新しい。埋土からは、金堂院所用瓦を含む多量の瓦片や古代から中世の土器片、青磁片、曲物などの木製品といった多様な遺物が出土した。金堂院一帯が寺域ではなくなった後に設けられ、中世には廃絶したとみられる。

南北溝SD1101 調査区東部で全面にわたって検出した幅2m以上、深さ最大0.6mの南北水路である。軒廊南雨落溝SD1085・軒廊北雨落溝SD1090などと重複し、これらより新しい。溝底の標高からみて南から北へ流れていたとみられる。埋土からは、古代から近世の瓦片や土器・磁器片など多様な遺物が出土した。金堂院一帯が寺域ではなくなった後に設けられ、近世には廃絶したとみられる。(諫早)

出土遺物

土器・土製品 整理用コンテナ25箱分の土器・土製品が出土した。奈良時代の土師器・須恵器を中心とし、中近世の土師器皿、瓦器椀、瓦質土器などが出土した(図Ⅲ-24)。また陶硯・土馬・埴輪などの土製品も少量出土した。

金堂院に関連する遺構から出土した土器は少量であるが、奈良時代後半の須恵器杯B蓋や土師器椀Aを含む。西大寺創建以前の遺構のうち、下層1期の遺構・整地土

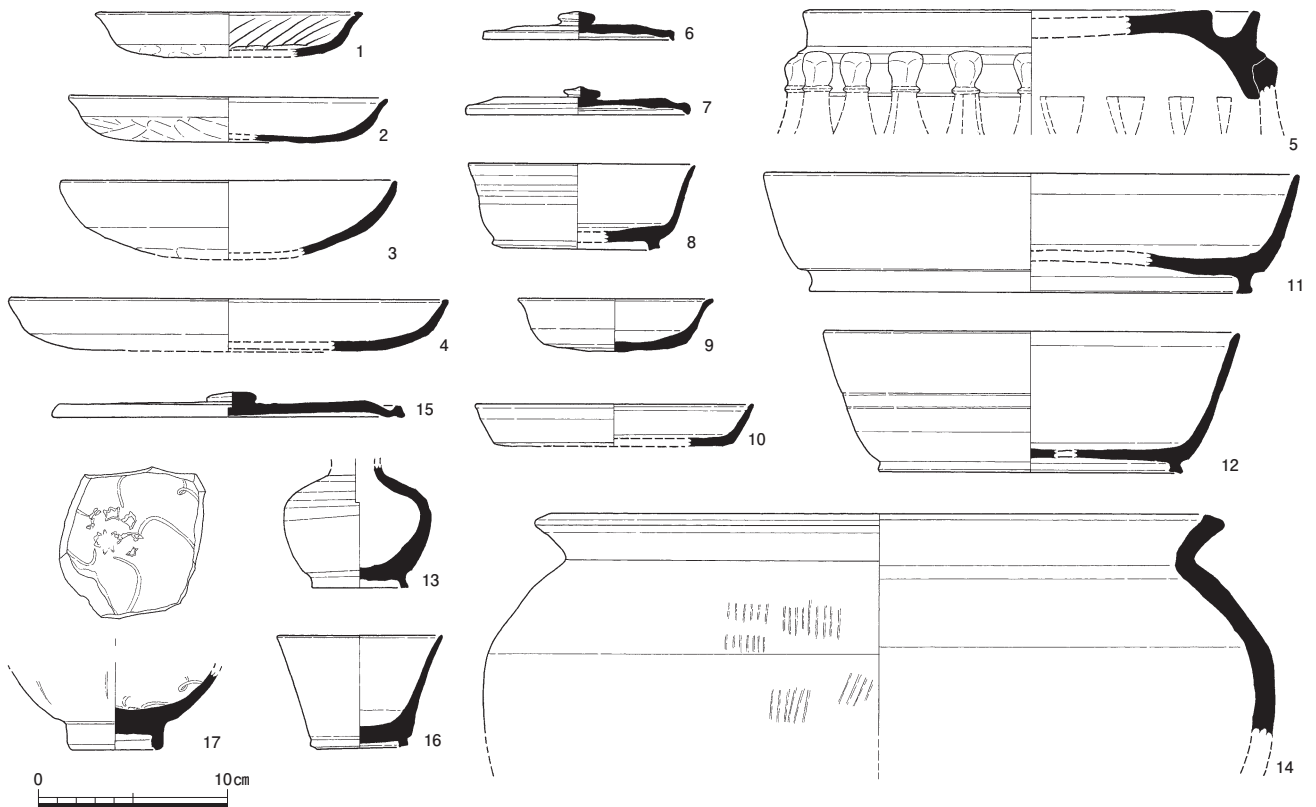
からはまとまった量の土器が出土した。

1～4は土師器。1・2は杯Aである。1は平底の底部から外方に口縁部が開き、口縁端部は内側に巻き込み、上方に面をなす。内面に一段放射暗文を施す。外面はa手法で調整する。2は口縁端部を丸くおさめる。内面は内底面に螺旋暗文を施す。口縁部は剥落が著しく暗文は不明。外面はb手法で調整する。3は椀D。底部から内弯する弧を描きながら口縁部が斜め上に大きく開く。口縁端部は丸くおさめる。底部外面にヘラ削りを施す。4は皿A。底部から丸みをもって口縁部が立ち上がり、口縁端部を小さく肥厚する。

5～14は須恵器。5は蹄脚円面硯。硯部と脚部を別作りするA類である。硯面は厚く、海部は断面U字形を呈する。外面に突帯を一条貼り付け、脚柱部を貼り付ける。脚頭は上面が広く脚節に向かってすぼまる形態で、貼り付け後に工具で側面を整える。内面および外面の突帯・脚頭下面に降灰がみられることから倒位で焼成したことがわかる。硯面・海部に墨が付着し、よく使いこまれている。杯B蓋(6・7)はいずれも扁平な形態で、平坦な頂部から屈曲して口縁部が続く。中央がわずかに高まる幅広のつまみを貼り付ける。口縁端部は短く折り返し、断面が三角形を呈する。杯B(8)は底部と口縁部の境に丸みをもち、底部内寄りに高台を貼り付ける。底部外面はヘラ切り後未調整である。9は皿E。丸底気味の底部から丸みをもって口縁部が立ち上がる。口縁端部は外反し、丸くおさめる。底部はヘラ切り後未調整である。10は皿A。平底の底部から直線的に口縁部が開き、口縁端部内面に凹線状の段をもつ。皿B(11)は復元口径28.4cm。やや軟質の焼成である。12は杯B。外面に2条の沈線を施す。13は壺M。体部はやや肩が張り、底部外寄りに低い高台を貼り付ける。底部はヘラ切り後未調整である。内面に漆が付着する。14は甕C。口頸部が短く、くの字状に屈曲する。外面は平行叩きの後、ナデ調整を施し、内面は横方向のナデ調整を施す。

これらの土器は1・2の特徴や土師器椀A片が一部含まれることから、平城宮土器Ⅲを主体とする時期に位置づけられる。

下層2・3期の整地土から出土した土器は破片が多い。15は下層2期整地土から出土した須恵器杯B蓋。頂部が平坦で口縁端部が屈曲し、嘴状を呈する。頂部は口



図Ⅲ-24 第505次調査出土土器 1 : 4

クロナデ調整を施す。下層2・3期整地土出土の杯B蓋は、このタイプのもが多く、奈良時代後半まで降ると判断されるが、土器の型式差から2・3期の時期差は見出しがたい。

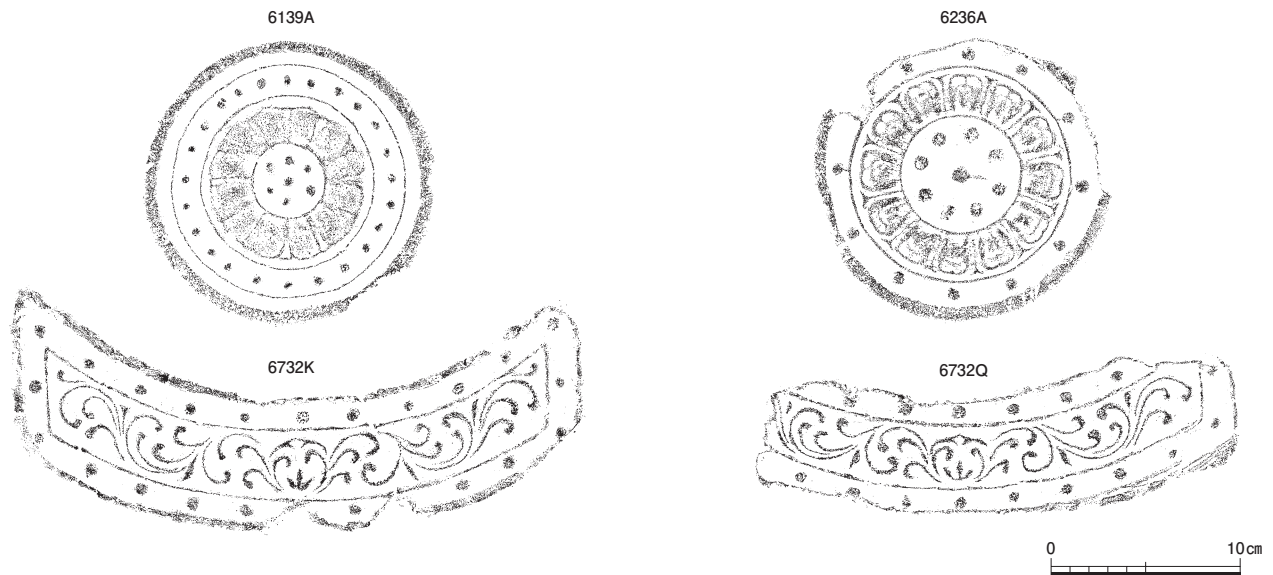
16は下層3期のSB1070北西隅の柱抜取穴から出土した須恵器碗B。口縁部が直線的に外方へ開く。底部外寄りに低い高台を貼り付ける。計量器などにも用いられる器形である。容量は約139mlである。

また、整地土各層からは多量の製塩土器が出土している。いずれも破片であるが、砲弾型をなす神野分類1類¹⁾が主体であり、回転台成形のものはない。この他、墨が付着した転用硯や大型皿B・皿B蓋、鉄鉢である外面にヘラミガキを施した鉢Aなどが出土している。

井戸SE1099からは龍泉窯系青磁碗(17)が出土した。高台の削り出しが浅く、底部が厚みをもつ。内外面に施釉するが、高台内面のみが露胎である。釉調は青みがかかった緑色を呈する。内面は片彫りにより5分割し、見込みに花文を印刻する。外面にも縦方向の片彫りを施す。この他、瓦質土器の鉢や土師器羽釜が出土した。なおこの井戸抜取穴からは、須恵器杯B、土師器皿Aなど

まとまった量の奈良時代の土器も出土している。(小田)瓦磚類 軒丸瓦53点、軒平瓦49点、丸瓦5617点(674.2kg)、平瓦25281点(1562.6kg)、磚40点(17.8kg)が出土している。奈良時代の軒丸瓦で、型式の判別した資料は29点であり、その内訳は6133型式R種2点、6135型式A種1点、6139型式11点(A種10点、種不明1点)、6236型式14点(A種12点、種不明2点)、6308型式D種1点である。一方、軒平瓦で型式の判別した資料は26点であり、その内訳は6682型式A種1点、6732型式25点(K種11点、Q種3点、R種5点、X種1点、種不明5点)である。

出土比率が高い軒瓦は、6139型式A種、6236型式A種、6732型式K・Q・R種である(図Ⅲ-25)。そのほとんどは、軒廊南雨落溝SD1085、北雨落溝SD1090、西面回廊東雨落溝SD1105・1095からの出土であり、創建時の軒廊SC1080および西面回廊SC1100に用いられた金堂院所用軒瓦と推定される。従来、創建時の薬師金堂所用の軒瓦の組み合わせは、6133型式R種-6732型式M・N種、西塔は6139型式A種-6732型式K種、東塔は6236型式A種-6732型式Q種とされており²⁾、創建時の西面回廊および軒廊所用の軒瓦は、東西両塔と同様とみてよい。「資



図Ⅲ-25 第505・521次調査出土の主要な軒瓦 1:4

財帳」などの記述から、東西両塔の建立は薬師金堂に遅れるとされていること³⁾、創建時の薬師金堂所用軒丸瓦である6133型式R種が、西面回廊SC1100造営前の整地土と基壇土の間から出土していることもあわせて考えれば、金堂院の造営はまず薬師金堂にはじまり、軒廊および西面回廊は一定期間をおいた後に設置された可能性が高い。

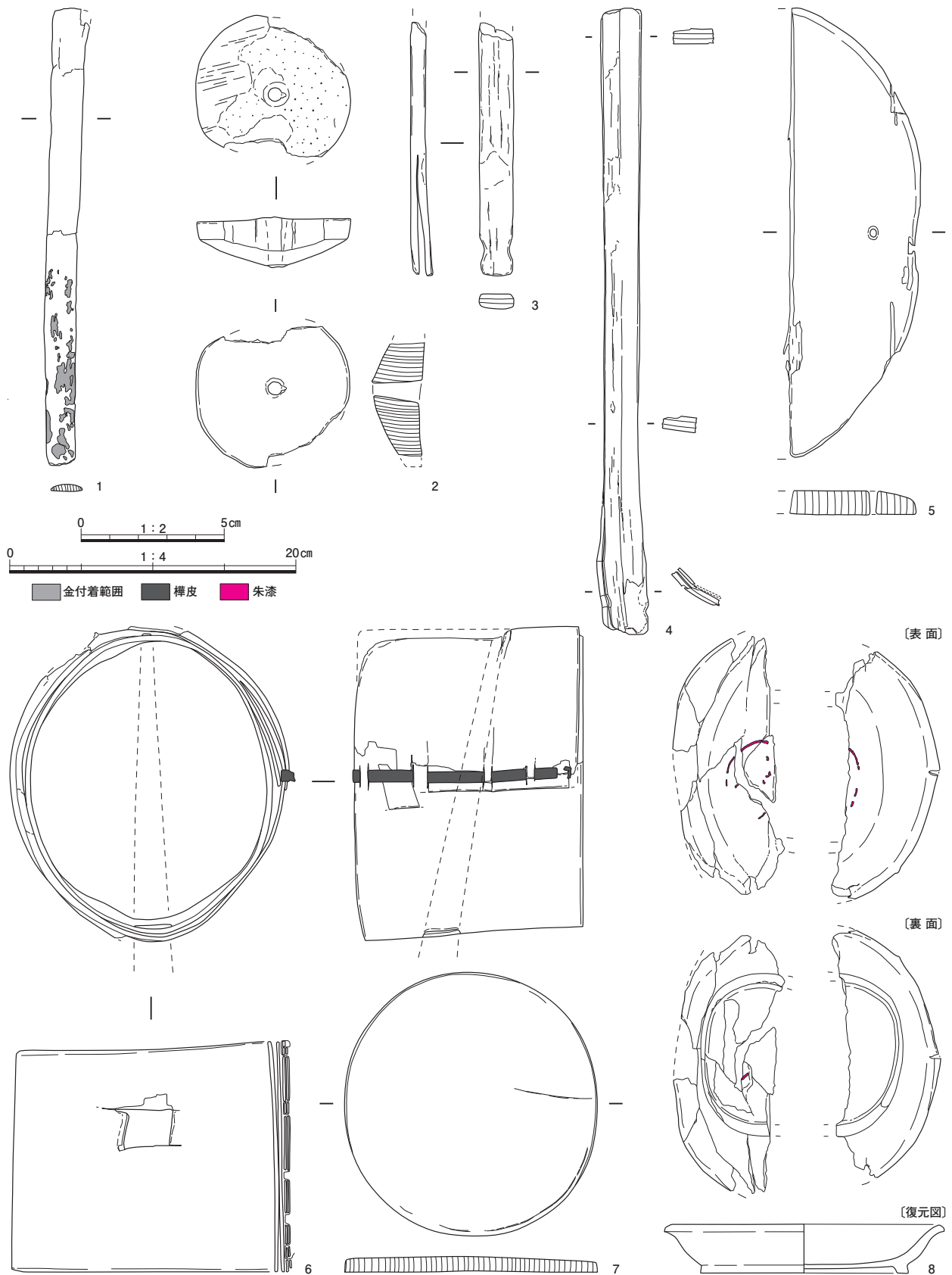
なお、これまでの西大寺金堂院周辺での発掘調査と同様に、本調査でも施釉瓦磚類の出土がめだち、緑釉軒丸瓦(6133型式R種)1点、緑釉丸・平瓦8点、緑釉磚9点、施釉円形垂木先瓦1点、三彩垂木先瓦1点、緑釉垂木先瓦1点などが出土している。

(渡辺文彦)

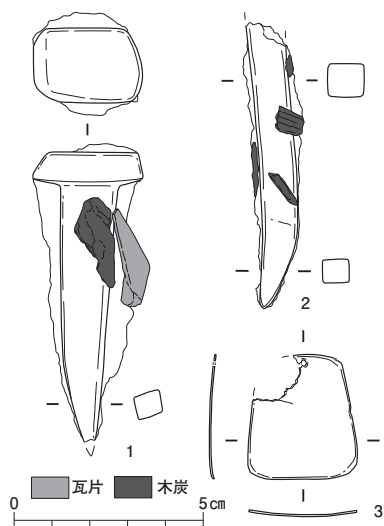
木製品 コンテナ4箱分が出土している(図Ⅲ-26)。遺構にともなうものは、下層3期の掘立柱建物SB1070北西隅の柱抜取穴と井戸SE1099の埋土からまとまって出土している。前者からみていく。1は全長15.8cm、幅1.1cm、厚さ0.25cm、断面偏半円形の棒である。表側のみ先端から6.8cmの範囲に金が付着しており、蛍光X線分析によっても確かめられた(材質分析は田村朋美による)。3と4は扁平な板状の柄先に割れ目を入れ、柄先付近の両側にV字形の切欠きを入れる形態の特徴から刷毛の柄部とみられる。柄先に何らかの毛を挟みこみ、切欠きに紐を巻き緊縛したものとみられる。3は小型で残存長8.7cm、最大幅1.2cm、最大厚0.5cmで、柄の断面は隅丸長方形を呈する。4は大型で全長43.7cm、最大幅4.0cm、最大

厚1.0cmで、柄の断面は長方形を呈する。2は逆截頭円錐形の紡錘車である。直径5.3cm、高さは中央部で1.7cm、端部で0.5cmをはかる。中央部に上面から直径0.8cmの円孔を穿孔しており、ここに糸巻棒を通したとみられる。なおこの柱抜取穴からは、このほかにも部材片やノミ削片、ノコギリによる切断痕が残る木端や檜皮片、木炭などが出土しており、建物解体に由来する可能性がある。

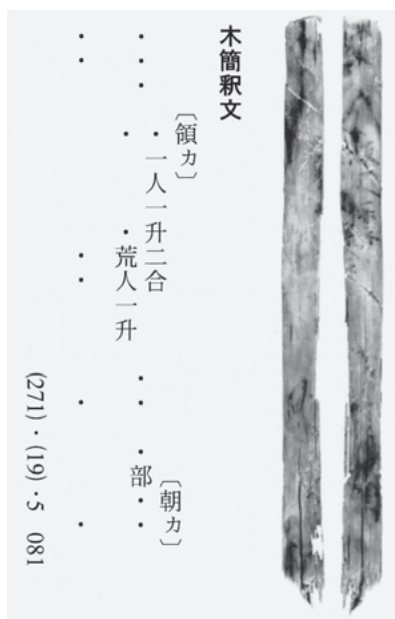
次に井戸SE1099の埋土出土のものについてみる。6は曲物柄杓の身で、直径9.8cm、高さ8.0cm。柄は出土していないが、側板にあげられた柄孔の大きさや位置から、先端を尖らせた断面長方形の角棒を斜めに挿し込んでいたとみられる。側板の綴じ合わせは1箇所、1列上外下内5段綴じで、綴じ合わせた後に、内側にもう一枚薄板をあてている。7は6の底板で直径8.8cm、厚さ0.5cmをはかる。側板と底板を結合する木釘などの痕跡はなく、底板を側板にはめ込むことで固定したものとみられる。側板の内側に当てた薄板は底板を固定するためのものであろうか。8は漆器皿である。全体に薄手のつくりである。底部と外傾し端部が外反する口縁部とからなり、底部外縁にわずかに立ち上がる高台をつくる。細片化し、また土圧等により大きく変形しているものの、直径9.8cm、器高1.7cm(高台0.3cm)に復元される。全面に黒漆を塗布し、内面中央付近に朱線で文様を描いている。5は蓋板片である。円板状で復元径約19cm、最大厚は0.8cmである。中央やや端部寄りに直径0.3cmの紐孔



図Ⅲ-26 第505次調査出土木製品 1:2 (4のみ1:4)



図Ⅲ-27 第505次調査出土金属製品 1:2



図Ⅲ-28 SB1070出土木簡積文と赤外線写真

を穿っている。上面は平坦で、下面は端部付近が丸みをもつ。なお井戸SE1099は西大寺金堂院廃絶後に設けられ、埋土に含まれる土器からみて中世に廃絶したとみられるが、軒廊北雨落溝SD1090やその下層の掘立柱建物SB1070北西隅柱穴を一部壊しており、出土遺物の中にはそれらに由来するものが含まれている可能性がある。

金属製品 鉄釘2点、飾金具1点、宋銭（元符通寶）1点などが出土した（図Ⅲ-27）。

2点の鉄釘はいずれも断面方形の角釘である。ほぼ完形の1は方頭で、残存長7.6cm、基部の最大厚は1.5cmをはかる。木炭片や瓦片が錆着している。2点とも西面回

廊東雨落溝SD1095埋土出土軒丸瓦の凹面部に落ち込んだ状態で出土したが、瓦釘にしては短く太い。

3は平面隅丸梯形を呈し、緩やかに弯曲した飾金具である。下層1～2期の整地土内から出土した。上辺寄りに直径1.5mmの孔をあけており、本来何かに懸垂していたとみられる。全長3.3cm、最大幅2.9cm、厚さ0.2～0.4mm。色調は光沢のある黄褐色で、蛍光X線分析によれば、銅と錫を主成分とし、わずかにヒ素を含み、鉛は検出限界以下であった（材質分析は降幡順子・田村朋美による）。非破壊分析のため腐食などの影響を考慮する必要はあるものの、佐波理（高錫青銅）と判断される。（諫早）

木簡 木簡は下層3期の掘立柱建物SB1070北西隅の柱抜取穴から、多くの木製品や木端などともに13点（うち削屑8点）出土した。

このうち意味のまとまりが判読できるのは、紹介する1点のみである（図Ⅲ-28）。腐蝕が進み墨痕の遺存状況が悪いが、「一升二合」「二升」など、米の支給量とみられる記載が読み取れ、食料支給に関わる数段にわたる記録が書かれた大型の帳簿木簡の断片であろう。「荒人」は個人名であるが、一行目は人名が入る余地はなく、労働の統括者としての「領」への支給の可能性が高い。多人数を組織した役務を窺わせる木簡である。（渡辺晃宏）

3 第521次調査

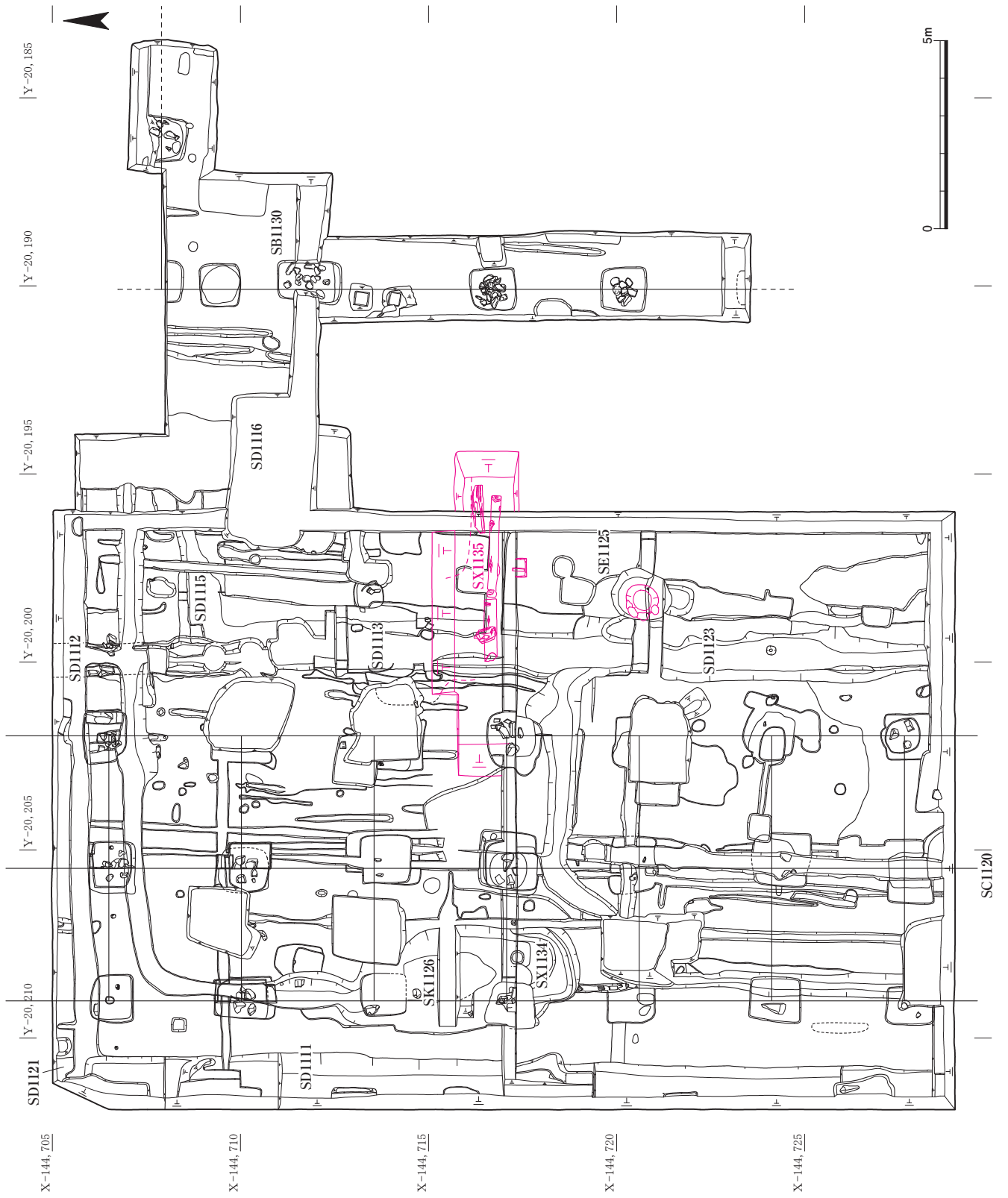
はじめに

第521調査は、奈良市西大寺小坊町内でのマンション建設に先立つ発掘調査である。調査地は平城京右京一条三坊九坪内にあたる。建物建設予定地において、約336㎡の調査区（南北24m×東西14m）を設定し調査を開始した。その後、西大寺金堂院に関する遺構が良好に検出されたことから、遺構群の広がりを確認するため、調査区西・北東・東側に約124㎡の拡張区を設定した。最終的な調査面積は約460㎡である。調査は2013年12月3日に開始し、2014年2月7日に終了した。

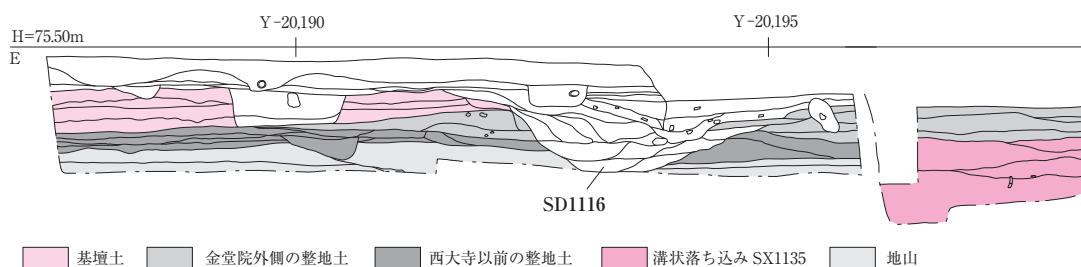
基本層序

上から、現代の駐車場整備盛土（約20cm）、旧耕作土・床土（約20cm）、中近世の遺物を含む遺物包含層（約10cm）、奈良時代の整地土（30～60cm）、暗褐色粘質土（10～15cm）および灰褐色粗砂からなる地山の順に堆積する。

奈良時代の整地土は西大寺に関するものと西大寺造営



図Ⅲ-29 第521次調査区遺構平面図 1 : 150



図Ⅲ-30 第521次調査区断断面図 1:80 右頁へ続く

以前のものがある。西大寺に関連する遺構を検出した整地土の標高は74.9～75.1mで、西大寺以前の整地土の標高は74.6～74.7m、地山の標高は74.3～74.5mである。

検出遺構

① 西大寺に関連する遺構

金堂院東面回廊SC1120 調査区中央で検出した梁行2間、桁行6間以上の複廊形式の回廊である。西側柱列の位置が、第505次で確認した金堂院西面回廊東側柱列の座標を薬師金堂中軸線で折り返した位置にあたることから、金堂院の東面回廊と判断される。柱間寸法は桁行・梁行とも12尺(約3.6m)等間である。

基壇は黄褐色系の粘質土を厚さ10cm前後で積み重ねており、40～50cmの厚さで残存していた。基壇土の中には、拳大の凝灰岩の塊や瓦片、灰色砂質土が多く含まれる層がみられ、これが回廊造営時の作業面であった可能性がある。基壇外装は残存しておらず、抜取痕跡らしき溝を一部検出した。基壇の東西幅は抜取溝の内側間で約10.5mである。

礎石は遺存していなかったが、一辺1.2～1.4m、深さ約60cm前後の方形の礎石据付穴を検出した。掘方に、人頭大～40cm大の石を黄褐色系の粘質土で埋める壺地業を施している。地山が砂層にあたる場所では深さ約1.1mに達する据付穴もある。検出面では、3～4個の石が表出しており、これらの石が礎石を直接支える根石であった可能性がある。根石の石材は花崗岩、安山岩、凝灰岩、片麻岩、チャートと多様な石材が用いられていた(本調査の石材分析はすべて田村朋美による)。

東面回廊西雨落溝SD1111 調査区西部で検出した南北溝。西肩が調査区外にあたるため、幅は不明だが、深さ約30cmで南北約23.5m分を検出した。凝灰岩製の側石が据えられていた可能性があるが抜き取られている。溝の埋土は暗褐色粘質土で、大ぶりの瓦片を多く含む。また、SD1111は調査区西北隅で途切れており、ここで金堂院北面回廊の南雨落溝に接続すると想定される。とぎれる部分より北側には、灰色砂質土の混じる黄褐色粘質土を

埋土とする浅い溝SD1121が掘削されており、これは北面回廊を貫く南北暗渠の可能性はある。

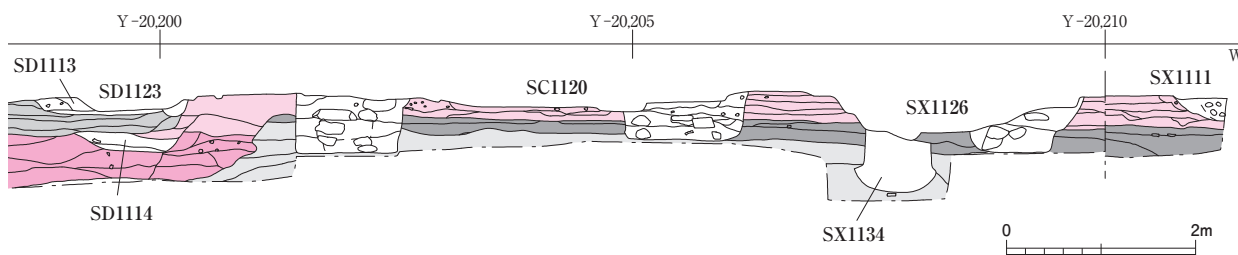
東面回廊東雨落溝SD1112・1113 調査区中央東部で検出した南北溝。調査区北方で東西溝SD1115と接続し、これより以北のSD1112は凝灰岩製の側石が遺存しており、側石間の幅は約60cmである。また、SD1115との合流点より南のSD1113は幅約1.7mと広がる。SD1113では溝西肩において側石の抜取痕跡とみられる凝灰岩片を含む浅い溝を検出したが、溝東肩では同様の痕跡は確認できず、東側石の存在については明確でない。溝底の標高差から、雨落溝の水は北から南へと流れていたとみられる。この雨落溝は、瓦片や焼土を含む埋土で埋まった後、再度幅50～70cmの南北溝SD1123として掘りなおされている。

東西溝SD1115 調査区西北部で検出した東西溝(図14)。回廊東雨落溝SD1113に合流する。幅約90cm、残存する深さ約10cmで、埋土に瓦片や焼土を含む。東端は南北大溝SD1116に壊されており不明である。

下層南北溝SD1114 回廊東雨落溝SD1112・1113の下層には幅50cm～1m、深さ10～30cmの南北溝が存在する。土層の観察から、SD1114が基壇土に由来する黄褐色系の粘質土で埋め立てられた後、金堂院外側の整地がなされ、SD1112・1113が掘り込まれたとみられる。この溝の性格は、金堂院全体の造営計画線などに関わって掘削された区画溝の可能性が考えられる。

礎石建物SB1130 東拡張区において検出した基壇をもつ礎石建物である(図Ⅲ-29)。基壇は拡張区よりもさらに南北と東側に延びており、南北16.5m以上、東西8.7m以上の規模である。基壇は、金堂院外側の整地土上に黄褐色系の粘質土を積んでおり、残存する基壇の高さは25～45cmである。西面の基壇外装や雨落溝は南北大溝SD1116により壊されており、確認できなかった。

建物は礎石据付穴を検出し、東西2間、南北3間以上の規模と想定される。桁行の柱間寸法は12尺、16尺、12尺となる。拡張区南壁では礎石据付穴らしき土層断面を



確認しており、建物はさらに南へ続くとみられる。礎石据付穴は一辺1.1～1.3mの方形で、掘方中央に人頭大～40cm大の石を集中させ、黄褐色系の粘質土で埋めている。深さは約40cmと回廊の据付穴に比べると浅い。北側の据付穴2基と南側の据付穴2基の柱筋が若干ずれることから、別棟の可能性も残るが、基壇は一連のものであり、間に雨落溝などの遺構は確認されなかった。

また、SB1130と金堂院東面回廊SC1120の礎石据付穴の様相を比較すると、SB1130は回廊と柱筋が揃わない点、礎石据付穴が浅く断面が逆台形状を呈する点、根石を掘方中央に集中して据える点などの違いがみられる。これらの違いが建物構造によるものか、造営の時期差によるものかなど、関連遺構の精査をおこないながら検討する必要がある。

なお、本調査区の北方約50mの地点でおこなった第242-19次調査⁴⁾でも礎石建物を検出しており、関連が注目される。また、SB1130は想定西三坊間路上に位置するが、SB1130の下層では、側溝などの条坊関連遺構は確認できなかった。

②西大寺創建以前の遺構

整地下層落ち込みSX1135 調査区中央において、西大寺金堂院造営以前に遡るとみられる東・南方向への大規模な落ち込みを確認した。この落ち込みは青灰色粘土や暗灰色砂質土が混じる土で一気に埋め戻されている。この落ち込み底面で直径約30cm、長さ約1.6mと約2.6mの筏穴を穿った丸太材2点と、建築部材の未成品とみられる材および丸太の半裁状の材各1点が出土した(図Ⅲ-33)。落ち込みの範囲およびその性格はあきらかでない。落ち込み底面の標高は73.8～74.0mである。

下層柱穴SX1134 調査区中央において西大寺造営以前の整地土から掘り込む柱穴1基を確認した。一辺約70cm、残存する深さ約60cmの掘方をもつ。東西南北に断割を入れ、組み合う柱穴を探したが確認できず、遺構の性格は不明である。

③西大寺金堂院廃絶以後の遺構

井戸SE1125 調査区中央東部で、瓦組井戸を検出し



図Ⅲ-31 SD1112・1113・1115検出状況(北東から)

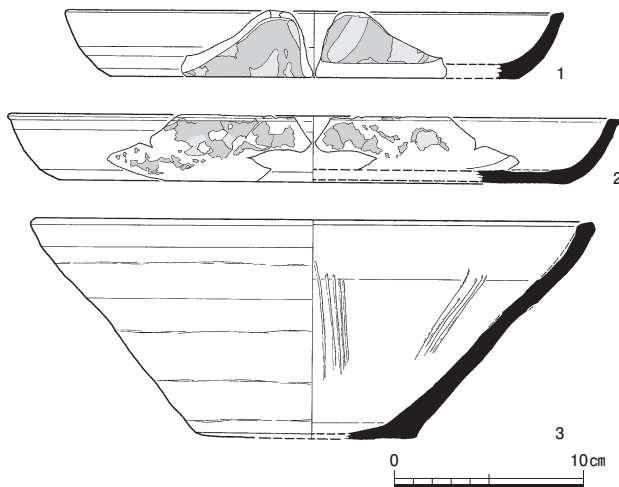


図Ⅲ-32 SB1130検出状況(北から)

た。南北溝SD1123埋没後に標高73.5m前後の粗砂層まで掘方を掘り、底面に人頭大の石を据え、その上に丸・平瓦片を円形に配しながら積み上げる。高さ10～15cmごとに軒丸瓦や軒平瓦、角石などを据えており、これらが構



図Ⅲ-33 SX1135木材出土状況（北西から）



図Ⅲ-34 第521次調査出土土器 1 : 4

築の単位となっている。掘方埋土から瓦質の播鉢が出土し、14世紀後半から15世紀前半頃に構築されたとみられる。なお、調査期間の制約から、写真計測法を用いて遺構実測をおこなった（本書44頁参照）。

南北大溝SD1116 東拡張区西部を南北に流れる幅約3.6m、深さ約80cmの溝である。土層断面の観察によると、複数時期に分かれる。十分に掘り下げることができなかったが、中近世に位置づけられる土師器羽釜や瓦質の火鉢などが出土している。また、土層観察によると同位置において金堂院外側の整地土に覆われる溝状の落ち込みも観察できることから、想定位置とはずれが、西

三坊坊間路西側溝の可能性も考えられる。

大土坑SK1126 調査区西部で検出した南北約6m、東西約3m、深さ約50cmの不整楕円形の大土坑。調査区北部で検出したL字状の溝が接続しており、この大土坑は水溜めとしての機能が考えられる。大土坑の埋土からは、西大寺の瓦が大量に出土した。

出土遺物

土器・土製品 須恵器・土師器・奈良三彩など整理用コンテナ13箱分の土器・土製品が出土した（図Ⅲ-34）。金堂院に関わる遺構からの出土は少なく、大半は遺物包含層、後世の耕作溝からの出土である。1・2は奈良三彩盤。1は南北溝SD1123から出土した。平底の底部から内弯気味に口縁部が立ち上がる。底部と口縁部の境に稜をなす。緑釉と白（透明）釉を施釉し、外面は両者を交互に塗り分け、内面は連弁を表現する。2は調査区東南の遺物包含層から出土した。器面の剥落が著しい。底部から丸みをもって口縁部が立ち上がる。1と同様に緑釉と白（透明）釉を塗り分ける二彩である。3は井戸SE1125掘方出土の瓦質摺鉢。直線的な体部と内弯する口縁部をもつ。底部を破損するが、器面の剥離状況から、穿孔した可能性がある。（小田）

瓦磚類 第521次調査では、軒丸瓦77点、軒平瓦62点、丸瓦5,272点（664.2kg）、平瓦2,811点（2250.7kg）、磚3点（2.6kg）が出土している。奈良時代の軒丸瓦で型式の判別した資料は41点であり、その内訳は、6133型式9点（O種1点、R種4点、S種4点）、6138型式I種1点、6139型式A種11点、6236型式21点（A種17点、H種2点、種不明2点）、6308型式D種1点である。一方、軒平瓦で型式の判別した資料は47点あり、そのすべてが6732型式（K種5点、M種1点、N種1点、Q種1点、R種1点、種不明19点）である。

出土比率の高い軒瓦は、東面回廊の東雨落溝SD1113と西雨落溝SD1111を中心に出土した6139型式A種、6236型式A種、6732型式K・Q種であり、創建時の東面回廊所用瓦と考えられる（図Ⅲ-25）。これら主体を占める軒瓦の型式・種は、東西両塔の創建時所用瓦と共通した傾向をもつ第505次調査とほぼ同様である。このことから、東面回廊の設置は、西面回廊と一体としておこなわれ、その時期は前述のとおり、薬師金堂建立後の一定期間をおいた後と考えられる。なお、第505次調査でま

の出土であった。

(渡辺丈)

建築部材 整地下層落ち込みSX1135より木材・建築部材4点が出土した。これらは現在調査中である。(小田)

4 西大寺金堂院の復元

ここから平城第505・521次調査の成果をふまえ、西大寺金堂院の復元案を提示したい(図Ⅲ-35・36)。

既往の復元案と「資財帳」 西大寺金堂院の復元案として主要なものに、大岡實⁵⁾、宮本長二郎⁶⁾による案がある。両者とも、「資財帳」の記載、東西塔跡から得られる金堂院の推定中軸線、遺存地割などをもとに、東大寺など同時代の類例と照らしあわせることで案を提示した。「資財帳」では、金堂院について、以下のように記す(『奈良六大寺大観 第14巻 西大寺 全』による。底本は西大寺蔵写本で、〔〕は内閣文庫本の記載による。〈〉は割注である)。

「金堂院

薬師金堂一字 長十一〔五〕丈九尺。広五丈三尺。

・・・(中略)・・・

弥勒金堂一基〈二重長十〔廿〕丈六尺。広六丈八尺。〉

・・・(中略)・・・

雙廊一周〈一百十七丈二尺。東西各軒廊。〉

中門一字〈長七丈八尺。広三丈。〉

東西脇門二字〈各長二丈。広二丈八尺五寸。〉

中大門一基〈二重。長九丈。広三丈七尺。〉在鐸八口。

東西楼門二基〈各長二丈六尺。広二丈。〉

塔二基〈五重。角十五丈。〉

・・・(略)・・・」

既往案の相違は、ここに記載される「弥勒金堂」に「雙廊」が接続するか否か、1周1,172尺をどう配分するか、などという点から生じたものである。

なおこれまで西大寺伽藍の復元では、平城京右京の条坊の国土方眼方位に対する振れ「北で0°19'50"西偏、西で0°18'58"南偏」が採用されてきた⁷⁾。今回の調査成果でも、これ以上に妥当性のある値は求め難く、以下ではこの値を採用して論を進める。造営尺についても同様で、1尺=0.296mを採用する。

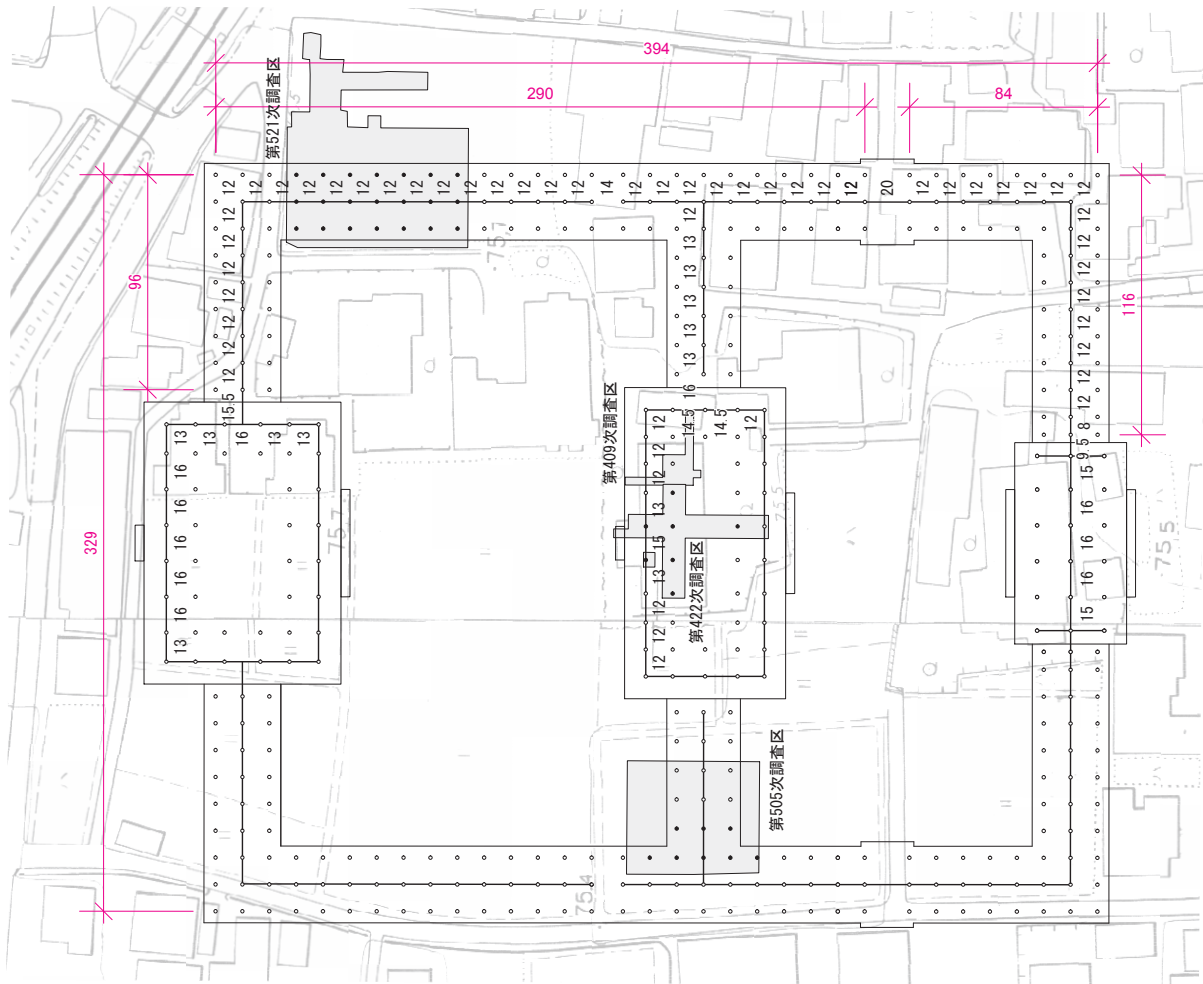
金堂院の東西規模 今回検出した西面回廊SC1100、東面回廊SC1120は、前述の通り、桁行、梁行とも12尺等間で、薬師金堂中軸を挟んで対称であることが確認できた。これにより金堂院の東西の規模が確定し、東西面回

廊の棟通り心々間で305尺(90.28m)、外側柱の心々間で329尺(約97.38m)となる。

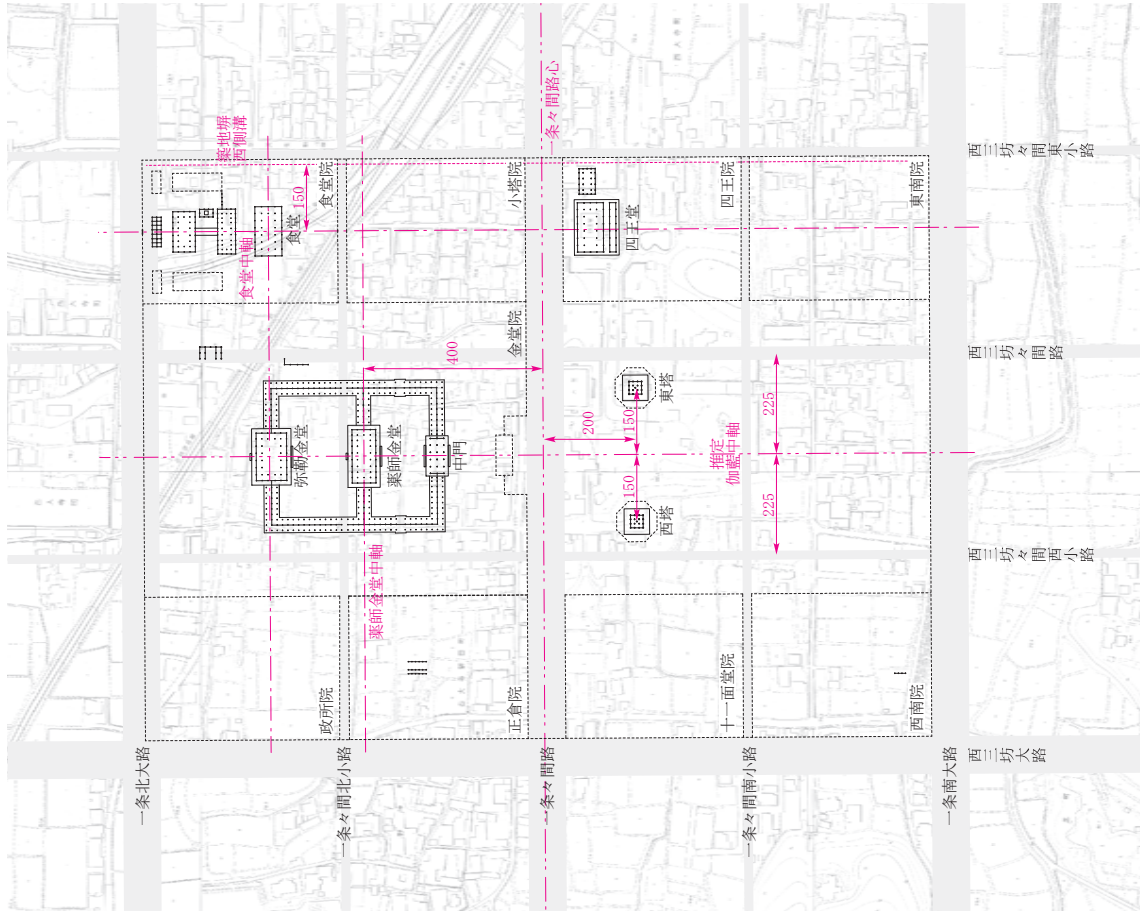
軒廊の計画寸法 薬師金堂に接続する軒廊SC1080は、薬師金堂とほぼ棟通りをあわせる複廊形式で、桁行13尺、梁行12尺である。検出されたのは、礎石据付穴で、関連する遺構として、南雨落溝SD1085、北雨落溝SD1090がある。軒廊の計画心を求める蓋然性が高い方法は、南北雨落溝の溝心の中間点を求めることであろう。もっとも遺構の残存状況が良好な点で心を求めると、SD1085の心はY-20,285.800で、X-144,766.368となり、SD1090の心はY-20,287.000で、X-144,754.403となる。その中間はY-20,286.400で、X-144,760.386で、「西で0°18'58"南偏」を考慮すると、薬師金堂西軒廊SC1080の計画心は、 $X=\tan 0^{\circ} 18'58" Y-144,648.461 \cdots \textcircled{A}$

となる。この計画心については、接続する薬師金堂の心とほぼ揃うと述べたが、厳密に検討するとずれが生じている可能性がある。薬師金堂の梁行規模については、「資財帳」に奥行5丈3尺の記載があり、発掘調査の成果をふまえた復元案では検出遺構もこれと齟齬が生じず、梁行4間、総長5丈3尺で、柱間を身舎14.5尺(約4.29m)、廂12尺(約3.55m)とみた⁸⁾。検出された遺構が礎石抜取穴と地業に据えられていた凝灰岩であるから、厳密な寸法の検討には向かないが、この復元案に則り、各柱位置に2枚据えられる凝灰岩の中心に柱が据えられるものと仮定し、心を測定すると、Y-20,250.655で、X-144,760.632となる。同じYの値を \textcircled{A} に当てはめて求められるX-144,760.189と比べると、約1.5尺南になる。

この点については、①金堂の心あるいは計画寸法の算定が誤っている、②凝灰岩の心と柱位置が一致しない、③金堂と軒廊の心が一致しない、などの解釈が可能であろう。さらに①を想定した場合、梁行総長を「資財帳」に記される53尺ではなく、52尺とし、身舎の柱間寸法を14尺とすると、ずれが小さくなり、遺構との齟齬も生じず、むしろ礎石抜取穴との関係は柱間14尺とした方が検出した遺構の心に近づく。今回の成果のみでは断言し難いが、今後も金堂院の復元検討にあたっては、「資財帳」の記載について、批判的な検討が求められる。ただし、薬師金堂の南北方向の中軸線が西大寺伽藍の南北中軸と一致し、一条条路の推定心から約400尺北に位置すること自体は否定されるものではない。



図Ⅲ-35 西大寺金堂院復元図
 (図中の数字は桁行柱間寸法。単位：尺)



図Ⅲ-36 西大寺伽藍復元図
 (アミカケは推定条坊。赤数字は計画寸法。単位：尺)

金堂院の南北規模 今回の調査区内では南北面回廊に直接関連する遺構は検出されなかったが、その位置を推定する上で材料を得ることができた。東面回廊SC1120は第521調査区外の北へ延び、どこかで西へと折れ北面回廊となる。東面回廊の西雨落溝と考えられるSD1111が調査区北部でとぎれることから、同位置で西へと曲がるものと考えられる。

そこで東面回廊SC1120が12尺等間で北へもう1間延びたところで、北面回廊に接続すると考えた場合、想定される東西溝の北肩から北面回廊の南側柱心までの距離は10尺(約3.0m)となり、東面回廊の推定柱心から西側雨落溝までの距離が5尺(約1.5m)であることよりも長くなる。この点についても、いくつか解釈可能で、①SD1111に接続する東西溝を北面回廊の軒の出よりも南に離れた排水溝とみる、②北面回廊が東面回廊よりも梁行規模が大きい、③東面回廊が北面回廊に接続する部分の桁行柱間が12尺等間とならないこと、などが想定できる。本稿ではひとまず①にもとづき、論をすすめ、その妥当性について検証したい。

弥勒金堂の位置 弥勒金堂の位置については、北面回廊の外とする案⁹⁾と、北面回廊が接続する案¹⁰⁾があるが、前者とした場合、回廊の南北長が極端に短くなるのが想定されるため、後者の蓋然性が高いと考える。弥勒金堂と回廊の接続関係について他の寺院の講堂と回廊の関係を参考にすると、①弥勒金堂の心と回廊の心をあわせる、②弥勒金堂の南入側柱筋の心と回廊の心をあわせるなどの方法が想定される。本稿では薬師金堂と軒廊の関係に倣い、①を採用する。この場合、現在の地割、特に弥勒金堂想定位置の北東に残る細い道の折れ曲がり、北面回廊から北へ突出する弥勒金堂の関係がよく重なり、以上の想定が一定の妥当性を持つことを示す。

さらに金堂院の東では、金堂院中軸から約500尺の位置に中軸を持つ食堂院が検出されている。このうち食堂跡(市12次)は礎石掘付穴を8基検出するのみであるので、精度の高い検討は難しいが、仮に南北心を求め(Y-20,090.000で、X-144.696.150)、西へと延伸すると、弥勒金堂の中軸=北面回廊の中軸は、金堂院の中軸において、約4.1尺南と算出され、ほぼ東西に並ぶといえる数値を示す。なお薬師金堂から北面回廊=弥勒金堂の心々寸法は218尺となる。

北面回廊の柱配置 前述の通り、東西面回廊外側柱の心々間距離は329尺で、また弥勒金堂の桁行総長は「資財帳」の記載より、116尺と想定される。北面回廊を桁行柱間12尺等間で割り付けると、東西とも入隅から6間、72尺で、弥勒金堂の側柱との柱間は15.5尺となる。弥勒金堂は「資財帳」の記載から二重と考えられ、大岡は桁行・梁行とも、側柱・入側柱間を13尺とみている。基壇の側柱からの出も、同程度と考えられ、回廊の金堂寄りの柱は基壇際に立つことになる。

東西面回廊北半の柱配置 金堂院の東西面回廊のうち、まず薬師金堂に接続する軒廊以北の柱配置を検討する。前述の通り、検出した遺構からは桁行柱間が12尺と考えられる。しかし、西面回廊SC1100の最北の柱痕跡と、東面回廊SC1120の最南の柱位置の南北間寸法は86尺(約25.5m)ある。これを12尺等間で割り付けると、7間で84尺となり、2尺余る。この点については、①ある1間のみ14尺となる、②ある2間のみ13尺となる、③ある範囲が完数尺とならない等間で割り付けられる、などの解釈が可能である。本稿では①と考え、軒廊との接続部から北に3間目と想定し、穴門などの小門が設けられるものと推測する。

東西面回廊南半・南面回廊の柱間寸法 金堂院の南限、つまり南面回廊や中門に関連する遺構は、これまで検出されておらず、その位置は「資財帳」の解釈や伽藍全体の寸法計画から想定するよりほかはない。本稿では、既往案と同様、桁行20間の東西小門が東西面回廊に開くと想定し、長1172尺を回廊外周の桁行長さの合計と考え、これに接続する弥勒金堂・薬師金堂軒廊・東西脇門・中門の寸法は含まないものとし、さらに桁行柱間ができるだけ12尺等間と考えたものを提示する。

まず東西面回廊を軒廊との入隅柱から南面回廊との入隅部まで12尺等間で10間とし、その中央に20尺の東西脇門が開くとした。また南面回廊を東西面回廊との入隅柱から12尺等間で7間とし、さらに中門より桁行8尺の1間分が延びるものとみた。この場合、中門の東西妻面の柱筋と回廊の柱との柱間は9.5尺となる。中門は単層切妻造と考えられ、桁行方向の基壇はこの範囲におさまるものと考えられる。

以上の柱配置で総長を計算すると、東西半ともに、12尺×8間(北面)+12尺×16間+14尺×1間(東西面北

半) + 12尺×2間(軒廊接続部) + 12尺×13間(東西面南半) + 12尺×9間 + 8尺×1間(南面東西半) = 586尺(1172尺×1/2)となる。

小 結 以上のように、今回の調査成果により、西大寺金堂院の東西規模が確定した。さらに「資財帳」の記載や遺存地割を検討することで、南北の規模や回廊の柱配置についても、新たな案を提示することができた。同時に議論の余地は多くあり、さらなる検証が求められる。(鈴木智大)

5 ま と め

平城第505・521次調査を通じてあきらかになった点は以下の通りである。

第505次 薬師金堂の西妻に取りつく軒廊と西面回廊に関連する遺構が検出された。軒廊・西面回廊の位置が確定したこと、軒廊が従来想定されていた単廊形式ではなく複廊形式であることなどは、これまで「資財帳」などから類推するほかなかった金堂院の規模や構造を考える貴重な手がかりとなった。また、瓦磚の出土状況から軒廊や西面回廊の造営が薬師金堂よりも遅れることがあきらかとなったことは、金堂院、ひいては西大寺全体の創建過程を考える上で重要な知見である。

また、西大寺に関連する遺構面の下層に3期にわたる整地面を確認した。部分的な調査に留まるため各期の詳細は不明であるが、出土遺物からいずれも奈良時代の整地である。右京一条三坊十坪に位置する調査地一帯に、平城遷都後、複数次に及ぶ大規模な整地がなされ、西大寺創建までの間、宅地として利用されていたのであろう。

第521次 東面回廊および礎石建物を検出した。東面回廊西雨落溝の状況から、北面回廊や弥勒金堂の位置についても手がかりが得られた。第505次調査の成果と併せることで、金堂院の規模について遺構にもとづいた復元案を提示できたことは、極めて高い学術的意義をもつ。また金堂院東方の礎石建物は、「資財帳」に記載されていない建物とみられ、従来の西大寺伽藍復元案では想定されてこなかった新たな知見といえる。

さらに遺構・整地土の重複関係から、西大寺金堂院の造営は、下層落ち込みを埋め立てた後に、A. 回廊基壇縁外側の位置に区画溝(下層溝)を掘削し、造営計画線を設定する、B. 金堂院東面回廊の基壇を積み上げる、C.

金堂院外側の整地を施す、D. 東面回廊の雨落溝を掘削・設置する、E. 金堂院東側の基壇建物を構築する、(厳密にはD・Eの前後関係は不明)という順序で進められたことがあきらかとなった。これは、西大寺金堂院ひいては南都の大寺の中心施設の造営過程の実態を考古学的にあきらかにするうえで、非常に重要な成果である。

これまでの西大寺旧境内の調査においては、薬師金堂跡を除くと金堂院に直接関連する遺構は確認されることがなかった。しかしながら第505・521次の調査成果をふまえば、市街化が進んでいるこの一帯に金堂院に関連する遺構が良好に遺存していることは、もはや疑いの余地がない。また平城遷都後、複数回にわたって整地がなされ西大寺創建に至るまでの間、宅地として活発に利用されていたこともあきらかとなった。西大寺中枢伽藍の建立された調査地付近の位置的重要性はあきらかであり、今後も周辺地の調査においては、遺構の確認と保存に細心の注意が払われるべきであろう。(諫早・小田)

註

- 1) 神野恵「都城の製塩土器」『塩の生産・流通と官衙・集落』奈良文化財研究所、2013。
- 2) 小澤毅「西大寺創建瓦と復興期の瓦」『西大寺防災工事・発掘調査報告書』西大寺、1990など。
- 3) 前掲註1。
- 4) 「西大寺旧境内の調査 第242-19次」『1993度平城概報』。
- 5) 大岡實「西大寺」『南都七大寺の研究』中央公論美術出版、1966。
- 6) 宮本長二郎「奈良時代における大安寺・西大寺の造営」『日本古寺美術全集 第6巻 西大寺と奈良の古寺』小学館、1983。
- 7) 小野健吉「遺跡の地形と造営」『西大寺防災施設工事・発掘調査 報告書』西大寺、1990など。
- 8) 林正憲「4 まとめ—薬師金堂復元案—」『奈良文化財研究所紀要2008』。
- 9) 前掲註5。
- 10) 前掲註6。

参考文献

太田博太郎「西大寺の歴史」『奈良六大寺大観 第14巻 西大寺全』岩波書店、1973。
大林潤「西大寺伽藍の造営計画に関する研究」『文化財論叢Ⅳ』奈良文化財研究所、2012。